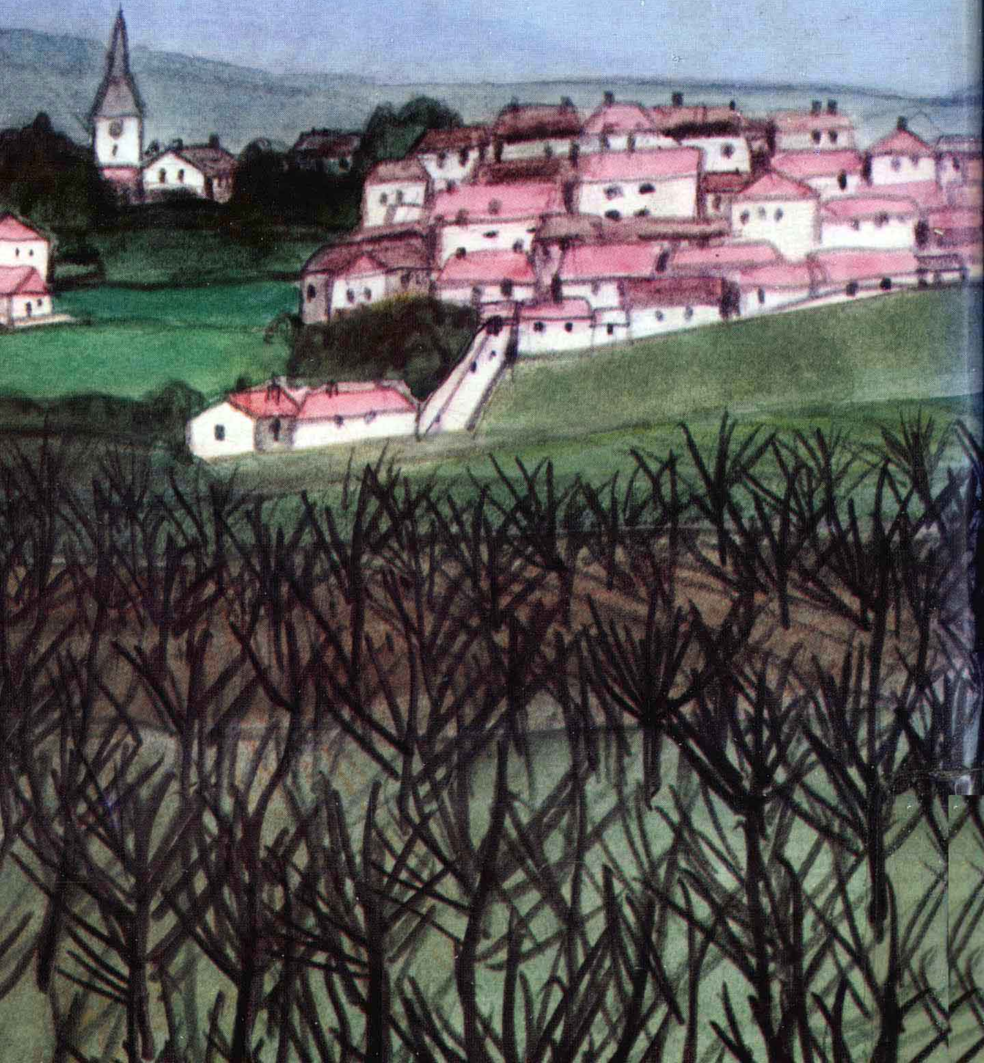
マルセル・パニョル

少年時代 3

秘めごとの季節

佐藤房吉訳



マルセル・パニョル

少年時代 3

秘めごとの季節

佐藤房吉訳

評論社

少年時代(バニョル) 3 秘めごとの季節

昭和50年 7 月10日 初版発行 ¥ 1,700

訳 者 佐藤房吉

発行者 竹下みな

印刷所 三倉印刷
製本所 株式会社小林製本

発行所 株式会社 評論社
(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2 — 16
電話代表 (265) 1961
振替東京 7294

(検印省略)

落丁・乱丁本は本社にてお取りかえいたします。 (A—1)

Marcel Pagnol

Souvenirs d'enfance III

Le Temps des secrets

息子フレデリックに

M・P・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秘めごとの季節

マルセル・パニョル　少年時代 III

装幀・装画　風間　完

例の『お屋敷』〔第二巻参照。〕での恐ろしい事件も、ブーズィーグの勝利によって輝かしい終りを迎えたため、わたしたちのささやかな『新屋敷』も明るさをとりもどし、いよいよ、夏休みでその幕を開けた。

しかし、その初日は、わたしが、わくわくしながら予想していたようなものとはならなかった。かねてから約束していたのに、夜が白みかけてもリリはやって来なかったからだ。結局わたしは八時まで、こんこんと眠ってしまった。

わたしを目覚めさせたのは、鉋で木を削るやわらかな音だった。

わたしは、様子を見に、急いで階下へ降りた。

父がテラスに出ていて、冬の間に狂ってしまったドアの繋ぎ金物を修繕しているところだった。司教様の笏杖のように、くるくると丸まった木屑が、父の頭の下まで巻き昇っている。

父は、仕事の手を休めないまま、指先で、無花果の下枝に棕櫚縄の切れはしで吊してある一枚の紙

をわたしに示した。

わたしには、その紙に書かれてあるのが、わが友のリリの、下手な、まちがいだらけの文字であることが、すぐに、わかった。

今朝は罠をはりには行けません。お父さんと、パス・タンへ、取り入れに行きましたから。来てください。李（すもも）の木のところでお昼を食べます。来てください。でも、急ぐことはありません。一日じゅうそこにいますから。君の友リリより。騾馬もいっしょです。君はそれに乗ってもかまいません。ですから、来てください。君の友リリより。去年イチジク喰い〔南仏でウグイス科の俗称。〕をとったところです。来てください。

少し前に階下へ来ていた母は、もう、台所で歌を歌っていた。

わたしが、朝の牛乳入りコーヒーをゆっくり味わっている間に、母はわたしの雑嚢の仕度にかかってくれた――パン、バター、ソーセージ、パイ、生の肋肉（あばら）を一切れ、バナナ四本、小皿一枚、フォーク一本、コップ一つ、それに、葦の節（ふし）に詰めて、ドングリで蓋をした塩。

その袋を肩にかけ、杖を持つと、わたしはたった一人で、夢の丘へと出発した。

『イチジク喰いの原っぱ』へ行くには、レ・ベロンの小さな台地を渡って、谷間へ降りさえすればいい。谷の底から反対側へと登れば小一時間で、その人目につかぬ原っぱへ出られるのだ。しかしわたしは、丘の尾根づたいに、テート・ロンド山の肩を回って行くことにした。白っぽい岩が三層の段

地を作っている山の頂上近くの黒っぽい松林が、朝の空にくっきりと浮き立っている。
七月の強い日射しに誘われて、蟬どもがじいじいと鳴いている。騾馬の通る細い道の端では、蜘蛛の巣がエニシダの枝の間できらきら光っていた。バティストの番小屋の方へゆっくりと登りながら、わたしは、去年のわたしの足跡の上にわたしのサンダルを乗せて歩いた。そうすると、風景の方が、わたしのことを思い出してくれるのだった。
ルドゥーヌーの曲り角のところで、頭に冠毛が生えていて、黒鶫ほども大きい二羽のヒバリがテレビンの木から、ぱっと飛び立った。わたしはわたしの杖を肩にあて、(ジュール伯父さんのように)間合をはかってから、『バン、バン!』と叫んだ。わたしは、一羽目は仕止めたものの、二羽目に対しては、狙いが低すぎて逃がしてしまったことにし、ひとしきり残念がった。
古い羊番小屋は、その屋根の半分が崩れ落ちてしまった。しかし、屋根のない壁に沿って生えている無花果の木は変わっていなかった。緑の傘を拡げたようなその梢からは、見覚えのある一本の枯枝が、その黒々とした姿をあいかわらず青空へ向かってのばしていた。
わたしは、襞のよった無花果の実から蜜を吸っている蜜蜂の羽音を聞きながら、その幹に抱きつき、象の皮膚のようなその肌に、愛情のこもった言葉を呟きながら接吻した。
それからわたしは、ラ・ガレットの斜面を見下ろす長い崖に沿って進んだ…崖の縁には、わたしが腹白や、山ヒバリをおびき寄せるために積み上げた小石の山が、まだ残っていた…わたしたちが、去年、つまり『昔』、わたしたちの罠を仕掛けたのは、この畴の裾になのだ…
タウメの山の、蛇腹状の段地の裾に着いたところで、わたしは、斜めにのびている例の大きな松の

下へ行って腰を下ろし、いつまでも、目の前の風景に見惚れた。

遠く、はるか遠くの右手、一段低くなった丘陵の向こうには、朝の海が輝いていた。

正面には、スペインの鋸山の連なりのように、裸のまま、白っぽく続いている、マルセーユからヴェールへと連なる山々がひらけ、その裾のあたりには、ユヴォーヌ川に沿って長々とのびている盆地を埋めるようにして、軽い朝霧が浮かんでいた……

そして左手には、『鷲の台』の、木立に包まれた高い崖がそびえ立ち、そこからゆるやかな斜面がのびて、ガルラバンの山の首筋に達していた。

軽いそよ風が吹き始め、その微風に掻き立てられるようにして、タチジャコウソウやラベンダーの匂いが漂ってきた。後手になって身を反らしながら、目を閉じたまま、わたしはわたしの祖国の燃えるような香りを胸いっぱいに吸いこんだ。その時、地面に散り敷いている松の小枝ごしに、石ではないが、なにか固いものがわたしの掌に触れた。地面を掻きわけてみると、真鍮の罠が一つ出てきた。錆ですっかり黒くなっている鶫用の罠だった。きっと、去年の夏休みの終り頃に、夕立に襲われた時、わたしたちがなくしてしまった罠の一つにちがいない……わたしは、墓穴の奥に、古代の王妃の艶も失せた鏡を発見した考古学者のような感慨をもって、しげしげとそれに眺め入った……この罠は、一年中、ここにこうしてじっとしていたのだ。そしてその上に、枯れた細い松の葉が、ゆっくりと、一本、また一本と積っていったのだ。時間が、一日、また一日、わたしの上に降り積っていたように……この罠は、きっと、自分が永久に見捨てられてしまったものと思いこんだにちがいない……

わたしは、この罠に接吻すると、それを開いてみた。バネは、もとどおりの力を持っているようだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

った。そこでわたしは、それを地面に擦りつけてみた。一筋の細い金色が、また姿をあらわした。これをまた使えるようにするのは簡単なことがわかった。わたしは立上ると、それを雑嚢に納め、取り入れにいそしんでいるリリの待つパス・タンめざして、駆足で、斜面を下った。

*

リリは、両側を高い岩の壁に挟まれた谷の底に細長くのびている畑で働いていた。右側には、よく手入されたオリーブの木立が続き、左側の崖の裾には、葉の茂った木立が、乱雑にのびている。それは李の木で、青みはじめた丸い実がいっぱいに実っていた。

フランソワ小父さんは、両足を踏ん張って、長柄の鎌を振り回していたし、リリは、その後から進みながら、父親の刈り取った麦を束ねて縛っていた……それは、蕎麦、つまり貧しい人々にとっての小麦だった。穂はまばらにしかついていなかったし、あちこち、大きく空き地になっているところもあった。それは、親の財産を食いつぶす放蕩息子のように、野兎どもが、若芽のうちに食い荒らしてしまった場所だ。おまけに、鼠に着物を食い荒らされた案山子が死に絶えてしまった後、カケスや山鶉が、今度は自分たちの番だとばかりに、熟れかけの実を盗み食いしてしまったのだ。

わたしが、この無残なありさまに同情していると、フランソワは笑いながらこう言った――『なに、この蕎麦のために泣いてやることはねえだよ。盗っ人どもには、ちゃんと、そのお返しはしてあるだからな！』

リリもそばから、彼の父がこの畑で、野兎を一日に二、三匹は仕止めていたこと、さらに、穂が出そろってからは、一ダースばかりの山鶉の若鳥を捕えたことを教えてくれた。

「毎年そうなってるだ」フランソワは言った。「その後にこうして残った分は、鶏の餌にと刈り取るわけだ……」

わたしには、この遠く離れた、痩せた畑こそ、農業とはなにかということを理解する唯一の、かつ、恰好な実例であるように思われた。

わたしが草むらの上に、わたしの雑嚢の中味をあけている間に、リリは、ズックの布の上に、皮製の『獲物袋』の中味をひろげた。

わたしたちは崖の裾に、三つの大きな石を使って即席の竈(かまど)を拵えた。リリは、テンニンカやマンネンロウが、ぱちぱちとはぜながら燃えている火の上に、持ってきた四角い金網を乗せ、そこで、わたしの肋肉と三本のソーセージを焼いた。肉もソーセージも、脂の涙をしたたらせながら、じゅうじゅうと音をたて、その濃い、おいしそうな煙の匂いをかぐと、わたしは、小犬のように、生唾がこみあげてきた。

この昼食はすてきにおいしかったし、黙々と食べる合間に交された会話は、これまた、まことに教訓に富んだものだった。

フランソワはナイフを使って、一口分ずつのパンを切りながら、頬をふくらませて、黙々と、ほとんど威厳にみちた表情で、それを食べるのだった。ところがそのうちに、彼は、ふと、わたしの瀬戸物の皿に目をとめると、まるで、とんでもない冗談でも言われたように笑いだした。そして、食事の

間中、何度か皿に目をやり、そのナイフの先で皿を指しながら、そのつど、声もなく、彼の両肩が耳の下で上下するほどに笑った。

食後、わたしの持ってきたバナナに移った時、彼は自分のバナナの皮をむきながら言った——『わしも、これを食べたことがあるだ。マルセーユで、兵隊に行っていた頃にな』

そして、手に持ったバナナを眺めてから、またにっこりと笑うと、それを呑みこんだ。

この時、一匹の、とても大きな、緑色のトカゲが、わたしたちから遠くない所を、急ぎもせずに横切って行った。

フランソワは、わたしにむかって、それを指さしながら言った。

「あれはなんだか知ってるだか?」

「もちろん。緑トカゲでしょう。去年、ぼくたち、罠で一ダースも取ったもの。勝手に向こうから罠にかかってきたんだけど!」

「わしが小さかった時分にゃ」彼は言った。「あれをよく食べたもんだ。そうさな、五十匹も食べたかな。わしのおやじが、皮むいて、腸(わた)抜いて、十分も火に焙ってな……」

「うまかった?」

「まずくはなかっただ。ただ、慣れてねえとな。とにかく、蛇よりはうまかっただよ……」

彼は、食通のような慎重さで、こう言い直した。

「……それもこれも、わしの舌にはということだがな……ま、世間にゃ狐の好きな人間もいるしな。ただ、わしは、狐は、あの臭いが好かねえ。それよりや、狸の方がうめえものな……」

彼はナイフの先で歯の間をほじくっていたが、やがて、ぱちんと音をさせてナイフを閉じると、また言った。
「…栗鼠もまた、食べてまずいもんじゃねえ。もっとも、松脂の臭いが気にならなければだがな。しかしまあ、なんてったって、針鼠にかなうものはあるめえよ」
わたしには、彼が、こんな奇妙な食生活を続けていたとは信じかねたので、こう訊ねた。
「小父さんは、今言ったような動物、みんな食べたことがあるの？」
「ああそうだ」
彼はリリの方を振り向いた。
「町の奴らは、わしらが針鼠を食べてるなんつうと、いつもびっくりする。だけんどよ、向こうさまだって、海胆は喜んで食べてるでねえか！」
勝ち誇ったようにこう言った後、彼は、しばらく考えこむようにしていたが、不意に言った。
「それどころか、蟇まで食べるいかもの食いまでいるつうでねえか！」
彼は、まるで、その歯の間で、蟇をぷつんと噛み切ろうとするかのように、ぱっくり口を開けてから、ゆっくりとそれを閉じた。
「へえ！」リリは、さも気持悪そうに顔をしかめながら言った。「やめて、そんな話！ 吐きそうになる！」
フランソワは立上った。
「仕方なかんべさ」彼は、哲学者のような口調で言った。「蓼食う虫も好きずきと言うでねえか。

ただ、わしの蓼は、針鼠だつうことだ。どれ、仕事にかかるとすっか！」
彼はまた鎌を手にし、リリは熊手を取り上げた。わたしは、彼らの後について、落穂を拾う役目を引き受けた。いずれは、山鶉の若鳥に『脂をのらせる』役に立つことになる落穂を、一ダースごとにまとめて、小さな束にするのである。
この農作業は日暮れまで続けられたが、それは楽しい一日となった。
帰りは、わたしとリリは、馬車に積んだ作物の上にはい上がり、フランソワは驟馬の手綱を取った。
わたしたちは、涼風の流れる谷間を進んで行った。長くのびている崖の天辺では、傾きながら生えている松の木立を、夕日が金色に染め、わたしたちが進むにつれて、蟬が群をなして、飛び散るのだった。
がさがさと音を立てる藁の上に腹ばいになったまま、わたしたちは、互いの心のなかを打明けあった。
リリは、わたしの顔は見ないようにしたまま、小声で言った。
「君に会いたくて、会いたくてしようがなかったよ」
「ぼくもさ」
馬車が揺れるたびに、髭のはえた麦の穂の爽かな香りに包まれたまま、わたしたちの体も上下した。リリがまた言った。
「明日の朝は罠を仕掛けに行こうよ。だけど、すぐ帰らなきゃならないんだ」

「どうして？」
「この麦を麦打場で碾かなきゃならないからさ。それに午後は、納屋に乾してあるエジプト豆を打たなきゃならないし」
彼は心配そうな表情になり、悲しそうでもあった。そして、こうつづけた。
「パパが、これからは、ほとんど毎日、パパの手伝いをしろと言うんだ。もう、毛が生えてきたからだってさ！」
彼は、片足をのばしてわたしに見せた。そのふくらはぎには、彼の気ままな暮らしをおびやかしている褐色の毛が生えかかっていた。
「ぼくが手伝いに行くよ」わたしは言った。
「来てもらってもあまり役に立たないよ。だって、エジプト豆が終っても、まだ仕事があるんだから。今頃の田舎では、いつだって、なにかしらやることがあるんだ。なにも、君がそれにつきあって、せっかくの夏休みを台なしにすることはないさ。ぼくの羽根蟻は、ぜんぶ、君にやるよ。いいのがあるんだ。茶色で、木の幹から取ったやつがね。狩の解禁日までは、君一人だけで罠を仕掛けに行ってくれよ。八月の十日からは、午前中と、夕方の五時過ぎは、自由にしてやるって、パパも言ってるんだ」
「いやだ」わたしは言った。「ぼく一人で行ったってつまらないもの。そのくらいなら、君といっしょに仕事をする方がいいや」
彼は、一瞬、わたしをみつめた。その目が光った。その顔も赤くなっているようにわたしには思えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com